

## 呉秀三先生ヨーロッパ

### 留学中の署名録

——オーストリー・ドイツ精神

神経学の巨匠たちの筆蹟——

岡田 靖雄

呉先生は一八九七年八月八日サラヂー号で横浜をたつてヨーロッパ留学にむかった。ロシヤにむかう廣瀬武夫も同船していた。ジャワ島のバイテンツォルグ(現ポゴール)などで精神科病院を見学したりして、九月三〇日マルセイユ着。一〇月三日ベルリンについて、岡田和一郎・藤浪鑑・土肥慶蔵などと再会。一二日目的地ウィーン着、ここには岡村龍彦・佐藤達次郎がいた。ウィーンでは、ウィーン大学の精神科病室でリヒャルト・フォン・クラフトーエビングの回診にしたがってその講義をきき、ハインリヒ・オーベルシタインルのウィーン大学神経学研究所で脳髓解剖をならい、近くの精神病院でレードリヒの回診についた。研

究は前二者およびビードルのもとでおこなった。

途中で、翌年四月二日にウィーンをたつて、九一十七日とマドリドにおける万国衛生及デモグラフィイ会議に列席し、二九日ウィーン帰着。往路ポルドーでその大学医学部教授レジス (Reiss) に会い、マドリドではラモニー・カハルにあった。

一八九九年の三月末か四月はじめにウィーンをはなれて、四月一九日にはライプツィヒでパウル・エミール・フレクシヒに会い、ついでイエーナに富士川游をたずねたりし、同二五日ハイデルベルグ着。ここではヴィルヘルム・ハインリヒ・エルプおよびフランツ・ニスルにつき、おそらく途中から、現在の精神疾病学体系をつくったエミール・クレペリンにつき、そのほかP・エルンストにもついたらしい。ここでは、ニスル染色による精神疾患の本態追求をおこなったが、研究の最終結果をえるにいたらず、一旦ハイデルベルグをはなれたのちもまたもどって研究を続行したが、発表できるだけの結論はえられなかった。

一九〇〇年五月七日にハイデルベルグをたつてイエーナから富士川と同行して八日ベルリン着。ここでは、ヘルマ

ン・オペンハイムなどについたようだが、ベルリンで具体的にだれにつきどういふ仕事をしたか、まだたしかめていない。

こののち、また長期間ハイデルベルグにいたり、パリの万国医学会にいたりし、一九〇一年七月はじめにハイデルベルグをはなれて、ベルリン、パリをへて、八月三日には夏目金之助におくられてロンドンを出航し、一〇月一六日に神戸に帰着した。

さて、現在呉章二氏（先生の二男）および呉忠士氏（先生の一男茂一氏の着嗣子）から医学文化館に寄託されているもののうちで、呉先生個人をはなれてもその資料的価値がきわめてひろく・たかいものとして、「長風万里集」（留学のさいの送別記念帳）、「在職十年記念祝賀アルバム」（一九一一年当時の精神科関係知友・門人の写真帳、署名入り）、「外遊記念記帳集」、「教授在職二十五年祝賀記念帳」（一九二三年、当時の医家・文人・画家など先生のひろい交際範囲からよせられた書および画をはりませたもの）がある。わたしの『呉秀三先生伝』（思文閣出版、一九八二年）では「外遊署名録」とよんでいる「外遊記念記帳集」には、一九二〇年外遊のさいの

ヴァルテル・シピールマイエル、マクス・ビルシヨフスキーなどの署名もあるが、署名のほとんどは留学時のものである。

この「外遊署名録」で留学中にえられた署名は一七名のもので、その署名も全部はよみとれておらず、文章の解読にまでは手をつけていないが、ここでその名のよみとれた人の名を日付け順にあげておこう。

一八九八年四月七日レジス（ポルドーで）。一八九九年三月ヒルシル、同九日カルプルス、同二日ユリウス・ワグネル・ヤウレグ、クラフトーエビング、オーベルシタイネル、同二日リードリヒ（いずれもウィーンで）、四月一九日フレクシヒ（ライプツィヒで）、九月一二日ニスル（ハイデルベルグで）、

一九〇〇年四月六日エルンスト、五月二〇日クレペリン（ともにハイデルベルグで）。

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての、オーストリーおよびドイツの精神神経学の巨匠たちの筆蹟を一冊にまとめているこの署名録は、世界にもまたとない貴重なものであろう。（東京 峽田診療所）